

[エッセー]

## 豊岡演劇祭 2022

——極私的見聞録——

とう うら  
東 浦 弘 樹

豊岡演劇祭は劇作家・演出家で芸術文化観光専門職大学学長である平田オリザ氏をフェスティバル・ディレクターとして、「5年でアジア最大級、10年で世界有数の演劇祭」、「世界に通じる持続可能な演劇祭」を目指して、兵庫県北東部、日本海沿いにある豊岡市で2020年から毎年9月に開催される演劇祭であるが、昨年2021年は新型コロナウイルスの感染拡大により中止になった。今年2022年は再開の年であり、新たなるスタートの年である。

豊岡演劇祭2022は9月15日（木曜）から25日（日曜）まで11日間にわたって開催されたが、筆者はそのうち9月16日（金曜）から19日（月曜・祝日）の4日間を現地で見ることができた。極めて個人的であり限定的ではあるが、そのときの模様をここに記したい。

出発まで

まず問題になるのは宿の手配である。筆者は兵庫県生まれ兵庫県育ちで、現在も兵庫県に在住しているが、恥ずかしながら豊岡がどこかさっぱりわからない。城崎と聞いてやっとわかったが、この段階では城崎は「町」であり、2005年に市町村合併によって豊岡「市」の一部となったことさえわかっていなかった。

豊岡演劇祭の開催場所は豊岡市全域（豊岡市、城崎町、竹野町、日高町、出石町、但東町）、さらには隣りの養父市にまで広がっているが、筆者は豊岡演劇祭というのだから豊岡に宿を取るのが無難だろうと考え、ネットで見つけたA…という旅行代理店を通してJR豊岡駅近くのビジネスホテルを予約したが、

これが間違いだった。

8月下旬、豊岡へ行く3週間ほど前だろうか、筆者は少し頼みたいことがあって予約先のホテルに電話をかけた。ところがホテルのフロントはそんな予約は入っていないし、ホテルは満室だと言う。慌ててA…社に連絡したが、「調べてみます」の一点ばりで埒があかない。

仕方がないのでA…社はあてにせず、自力で宿を探した。豊岡のビジネスホテルはどこももう満室である。城崎の旅館に素泊まりで予約を入れたが、これが大正解——温泉もあってビジネスホテルよりはるかに快適であった。豊岡演劇祭に行くのなら、城崎の旅館に宿を取るのが一番いいだろう。

なお、A…社からはずいぶん時間が経ってから「すみません、やはり予約は取れていませんでした」と連絡が来た。別のビジネスホテルをすすめてきたが、もちろん筆者は断った。たまたまホテルに直接電話を入れたからよかったものの、そうでなければ現地で非常に困るところだった。ここにはイニシャルしか書かないが、A…社はテレビやネットでコマーシャルをうっている有名な会社である。猛省を期待したい。

次に問題になるのは、どの日にどの演目を見に行くかである。筆者は城崎で一つ、豊岡で二つ、養父で一つ、計四つの芝居を見ることにして、豊岡演劇祭の公式サイトから予約を入れた。ところがここで問題が生じた。サイトから予約するためにはHORAIというアプリを入れなければならない。スマホ音痴の悲しさですっかりパニックに陥ってしまった筆者は、同じ演目を二重に予約してしまったのだ。

サイトには予約を取り消すボタンがない。慌てて問い合わせ先のフェスティバルセンターに電話を入れた。対応そのものは非常に丁寧ではあったが、「原則としてキャンセルは不可」とのこと。わけを話して食い下がると「実行委員会と相談してみます」と言う。最終的には返金対応してもらえたので結果オーライだが、愉快的な経験ではなかった。全ての責任は操作を誤った筆者にあるわけだが、こういうことは誰にでも起きうることだ。システムなり対応なりの改善を期待したい。

9月16日（金曜）——初日『思い出せない夢のいくつか』

いよいよ当日。正午すぎに JR 大阪駅から特急「このとり」に乗って城崎へ向かう。駅弁を食べてのんびり景色を眺めているうちに城崎温泉駅に到着。我々が予約した旅館「おけ庄」は駅から徒歩5分、外湯の一つ地蔵湯の斜め向かいで川沿いの絶好のロケーション。荷物を解いて、街を少し散策し、駅前の演劇祭用のインフォメーションで情報収集。

温泉街に飲食店は多いが、多くは午後5時や6時に閉店する。旅行客の多くは旅館で夕食を取るからだろう。しかし、我々は素泊まり——ネットで比較的閉店時間の遅い店を探し、6時少し前に入店。海鮮丼を食べた後、徒歩で城崎アートセンターへ向かう。

城崎アートセンターは中心街から徒歩30分。散策にちょうどいいと言えなくもないが、やはり少し遠い。歩いて来たのは我々くらいで、他はみんな自動車で来るのだろう。

演目は平田オリザ氏作の『思い出せない夢のいくつか』。筆者はピッコロ演劇学校時代、平田オリザ氏の特別授業を二度受けたことがあるが、恥ずかしながら氏の芝居を見るのはこれが初めてである。

演出は平田氏の戯曲を読んで感銘を受けたというベルギー人演出家カミーユ・パンザ。キャスト・スタッフもベルギー人で、フランス語での上演である。海外の劇団が日本語字幕付きで芝居を上演することは珍しくないが、日本の劇作家が書いた戯曲をそのような形で上演するのは非常に珍しいと言うべきだろう。筆者は最前列に座っていたが、日本語字幕がぼやけてほとんど見えず、もっぱらフランス語で聞いていた。ただ、同行した妻は字幕は十分見えたと言っているのだから、これは筆者の視力のせいかもしれない。

登場人物は女ふたり、男ひとり。夜行列車に乗っている。パンフレットによれば、女のひとは往年の人気歌手・由子、もうひとりの女はその付き人・貴和子、男はマネージャー・安井とのことだが、セリフを聞くだけでは三人の関係は決して明らかではない。貴和子は26歳の女性という設定で歌手の由子から *Petite Kiwako*（小さな貴和子）と呼ばれているのだが、中年の小太りの女

優が演じているため少し違和感があった。

パンフレットのキャッチコピーには「大人のための『銀河鉄道の夜』」とあり、セリフの中でも『銀河鉄道の夜』への言及が執拗なまでに繰り返される。平田オリザ氏はよほど宮沢賢治が好きなのだろう、同じ豊岡演劇祭の演目に平田オリザ氏作・演出の『銀河鉄道の夜』が上がっているし、翌日に見た『日本文学盛衰史』でも宮沢賢治をラッパーの若者に仕立て上げ、印象的な役割を与えていた。

9月17日（土曜）——2日目『日本文学盛衰史』、『降りくるものの中で——とばり』

朝は宿でゆっくりして、城崎温泉駅前で早めの昼食として名物のカニ寿司を食べてから JR で養父市の八鹿<sup>ようか</sup>へ向かう。

JR で来る客は少ないのだろうか、駅を降りても閑散としている。駅前に商業施設などは見当たらない。幸い我々と同じ列車で来た三人組が会場となるやぶ市民交流広場に向かう様子なので、それとなく後をついていくことにする。

線路に沿った一本道を10分か15分ほど歩いたが、全くひと気はない。知らなければ演劇祭が開かれているとは誰も思わないだろう。ただ、会場となるやぶ市民交流広場は活気に溢れていた。市民交流広場は「広場」という名前がついているが、実に立派な建物であり、立派な劇場がある。問題があるとすれば、そこにそういう施設があり、豊岡演劇祭の演目が上演されているということが地元の住民にどれだけ認知されているかであろうか。

この日ここで上演されたのは高橋源一郎氏原作、平田オリザ氏作・演出の『日本文学盛衰史』——キャスト、スタッフは平田氏が主宰する劇団・青年団のメンバーである。面白いのは開演前から女中役の女優たちがなにやら話したり、鼻歌を歌ったりしながら座敷にお膳を運び込んでいることである。観客が入ってきた瞬間から芝居は既に始まっているというわけだ。演劇の世界では時折あることだが、こういう趣向は楽しい。

時間が来るとブザーもアナウンスもないまま芝居に入る。次々に役者が舞台

上の座敷に現れ膳の前に座る。話の様子からそこは北村透谷の葬儀の席であり、客たちは明治の文人たち——森鷗外、夏目漱石、二葉亭四迷、島崎藤村、田山花袋、樋口一葉、正岡子規、国木田独歩、中江兆民、幸徳秋水といった面々であることがわかる。

彼らはみな思い思いに話をしている。だから、ふた組の会話が並行して行われる場面もある。セリフが聞き取りにくいと言えばその通りだが、現実の宴席（葬儀の席だから「宴席」ではないかもしれないが）ではよくあることだ。現実がそうである以上、舞台でも同じようにするという趣向であろう。

会話の中で鷗外が「漱石に Line で連絡する」と言ったり、透谷の妻が喪主の挨拶で「エリザベス女王も亡くなり、安倍元総理の国葬もあのようなことになり」と言ったり、時代錯誤的というのだろうか、要するに明治の物語に現代の事柄を混ぜ込むギャグは、パターンとして決して珍しいものではないし、あざといと言えばあざといが、筆者は好きだった。

ただ、シェークスピアの『ハムレット』の話の際、「私は世パブで見た。主演は野村萬斎の息子だった」、「私は彩芸で見た。主演は藤原竜也だった」などと言うのはいかがなものだろう。「世パブ」は東京の世田谷パブリックシアターの、「彩芸」は埼玉の彩の国芸術劇場の略称・俗称であると想像できるが、関西人には馴染みがなく、演劇人が演劇愛好家にしかわからない。そういう内輪向けのギャグ、狭い「演劇村」でしか通用しないギャグを使うのは感心しない。演劇祭の演目なのだから、もっと一般の観客、初めて芝居を見るような観客をも取り込むような芝居にして欲しかったと思う。

やがて来客たちが去り、田山花袋と島崎藤村だけが座敷に残る。田山花袋は畳の上につつ伏せで突っ伏す。気分が悪いわけではない。女性が座っていた座布団の匂いを嗅いでいるのだ。この芝居では田山花袋を徹底してコミカルに描いており、第2景ではなぜか田山はアダルトビデオを撮っていることになっていて、女流作家に叱られてはひたすら頭を下げている。田山花袋の関係者が見たら気を悪くしそうだが、芝居のアクセントとしては決して悪くないと筆者には思えた。

照明が徐々に暗くなり、田山花袋と島崎藤村だけに明かりが残る。すると来客たちが座敷に現れる。第2景、正岡子規の葬儀の席である。来客が揃うと喪主の挨拶があり、来客同士の会話があり、来客が去り、田山花袋と島崎藤村だけが残る。田山は女性が使っていた座布団に突っ伏すという展開が繰り返され、第3景・二葉亭四迷の葬儀、第4景・夏目漱石の葬儀と続く（喪主はもちろんその都度違う人物だが、つねに同じ女優が演じている）。

こういう芝居の作り方には賛否両論があるだろう。何より問題となるのは、観客の側にある程度の文学的知識がないとわけがわからないことである。だが、少なくとも名前くらいは知っている文豪たちが大部分はくだらない話を、しかしときどきは文学や社会についてのまじめな話をしているのを見るのは筆者には面白かったし、最後まで登場する文豪もいれば、途中で死んでしまう文豪や新たに加わる若い文豪もいるというところで時の流れを感じさせるのも面白いと思った。

芝居が終わると八鹿駅にとって返し、JRで豊岡駅まで行きタクシーを拾って豊岡市民会館へ向かう。道中、列車に揺られながら「こんなふうに見知らぬ土地に旅行に来て、芝居をはしごするというのはなんとという贅沢だろう」と思ったが、同時に「遠いなあ。もう少し近ければいいのに」とも思った。

豊岡での出し物は山海塾の『降りくるものなかで——とばり』。スキンヘッドに全身白塗りで踊るあの伝説の舞踏集団・山海塾である。おそらく今回の演劇祭に参加する団体の中で最も有名な団体だろう。

日本の前衛的な舞踏はヨーロッパで高く評価されている。フランスではButo（舞踏）がひとつのジャンルを表す普通の名詞になって久しい。筆者は舞踏はどれも苦手ですれまで見たことがなかったが、この機会を逃すと一生見る機会がないかもしれないと思い予約を入れた。それで実際に見てどうだったかという……恥ずかしながらどう評していいかわからないというのが正直なところだ。演劇とは何よりもまず肉体表現である、セリフに囚われてはならないというのはよくわかる。しかし、一切セリフのない舞踏をどう理解すればいいの

だろう。そもそも「理解」しようというその魂胆が間違っているのだろうか。

『降りくるもののなかで——とぼり』は「I. 虚空から, II. 夢の中の闇, III. 写しあうものたち, IV. 闇の中の夢, V. 夜の青, VI. 降りくるもののなかで, VII. 虚空へ」と章分けされているが、何が「夢の中の闇」で何が「写し合」っているのかさっぱりわからない。ただ、同行した妻は意外に気に入ったようで、「ダンサーが顔を上げて大きく口を開けたとき、叫び声が聞こえてくるような気がした」と言っていた。筆者もそれは感じたが、そういう見方をすべきだったのかもしれない。

9月18日（日曜）——3日目、ストリート・パフォーマンス

この日は城崎で外湯めぐりをしながら温泉街6ヶ所で行われるストリート・パフォーマンス、つまり大道芸を見た。長くなるといけないので、筆者が見た7組の大道芸人について簡単な印象のみを記す。

最初に見たのは九里ヶ崎雪彦のパフォーマンス。雪彦だからだろうか、全身白づくめで顔も白塗りであり、一切喋らない。筆者が箱に200円を入れると似顔絵を書いてくれたが、白い紙に白のクレヨンで描き、落款も白なので、結局白紙同然であるというユーモラスなパフォーマンスを見せてくれた。

次に見たのはファントムのパントマイム。雪彦とは逆に全身黒づくめで、シャツだけは白く、白いファントムマスクを被っている。200円入れると見事なパントマイムを披露し、キャンディーをくれた。

三番目はケチャップリンたび彦。名前の通りチャップリンの扮装をしている。コミカルな動きでジャグリングを見せてくれた。

四番目は鈴木仁。学生帽を被り顔を白塗りにして、踊りともジャグリングともつかない不思議な動きを見せてくれた。顔を白塗りにしているのは寺山修司へのオマージュであろうか。

五番目はばわあ。箱や棒を使ったジャグリングも見事だが、喋りも見事。人を楽しませるすべにたけているというべきか。個人的にはこれが一番好きだった。

六番目は長岡雄大とめぐみ梨華の男女ペア。ボールを使ったジャグリング（長岡）とコマを使ったジャグリング（めぐみ）を組み合わせ、男と女のストーリーを作っていた。

七番目のチバドロ・アノはエキゾチックな音楽に合わせて獅子の頭のようなものを持ってゆっくりと踊っていた。愛する女を食べてしまった獅子の悲哀を表現しているのだろうか。

17日（土曜）、18日（日曜）、19日（月曜・祝日）の三日間は、このほかにも多数の大道芸人が街中に繰り出しパフォーマンスを見せるはずだった。しかし、台風14号の上陸により19日のパフォーマンスは中止。ばわあの言葉によると、大道芸人たちは場所を提供されているだけで、運営から一銭ももらっていないそうだ。だとすれば被害甚大であろう。

その意味でも、この種のパフォーマンスに投げ銭をする慣習が是非日本に根付いて欲しい。それは大道芸人たちの生活のためでもあるが、同時に大道芸の伝統をつなげることにもつながるはずだ。筆者は些少ではあるが、自分が見た大道芸には投げ銭をすることにしているし、実際城崎でもそのようにした。

台風の上陸は我々にも大きな影響を与えた。我々は翌19日に豊岡で芝居を見た後、帰途に着く予定だったが、我々が乗るはずの列車のみならずJRの列車の大半が運休になってしまったのだ。やむをえず息子に連絡したところ、豊岡まで自動車で迎えに来てくれることになったので助かった。持つべきものは運転ができる息子ということだろうか。

9月19日（月曜・祝日）——『新・豊岡かよ！』

最終日の朝、我々は宿をチェックアウトし、JRで豊岡駅へ向かった（まだこの段階では各駅停車は動いていた）。

この日、駅直結のショッピングモール内にある豊岡市民プラザで上演されたのは、内藤敬裕ひろり氏作・演出の『新・豊岡かよ！』。内藤氏は南河内万歳一座の座長で、筆者とは同い年。個人的な面識はもちろくないが、氏の名前や南河内



万歳一座の名前は40年ほど前から知っているし、実際に舞台を見に行ったことも二度ある。さらに言えば、ピッコロ演劇学校で一度授業を受けたこともあり、心理的には近い演劇人である。

『新・豊岡かよ!』は2005年に一市（豊岡市）五町（城崎町、竹野町、日高町、出石町、但東町）が合併した際のことを面白おかしく描いた芝居であり、役者は総勢20名、南河内万歳一座の役者6名と舞夢プロ所属の役者1名に加えて、豊岡市民13名が出演していた。こう書くと、主要な役は劇団員が演じ、市民は脇役・端役を演じるのだらうと思う人も多いだろうが、決してそうではない。プロの役者も市民も一丸となって一つの芝居を作り上げており、見ている分には誰がプロで誰がアマチュアかさっぱりわからなかった。

この芝居は2020年に上演された『豊岡かよ!』の改訂版とのことだが、内藤氏は2010年から豊岡市民プラザの演劇プロジェクトで豊岡市民有志を指導し、数々の芝居を上演してきたそうである。演劇祭とは関係なく……というか、演劇祭以前にそのようなプロジェクトがあったわけだ。内藤氏の地道な努力と、呼びかけに応えた市民有志の熱意には頭が下がる思いがする。

登場人物は一市五町を代表する公務員とそれぞれの地域の住民たちである。彼らは合併には反対ではないが、新しくできる市の名前をどうするかについては意見が分かれている。それぞれみな現在自分が住んでいるところの名前を何らかの形で残したいと思っているのだ。彼らの間で言い争いが起こり、それぞれ他の地域のことを悪く言うのだが、結局それは自虐に過ぎず笑いが生まれる。

但東町の役場に勤める豊岡という男は但東町の代表、つまり「但東の担当」になってしまい、義父から豊岡市に併合・吸収されたという印象は与えたくない、なんとしてでも但東の名前を残したいと言われ困ってしまう。困り果てた彼は、豊岡でなければなんでもいいとばかりに、竹野町、日高町、出石町の代表と結託して、城崎市という案を出す。しかし、驚いたことに城崎町の代表はそれを辞退する。城崎市になれば、城崎町以外の町の温泉も城崎温泉を名乗れるようになるからだ。

最終的に新しい市の名前は豊岡に落ち着く。ちょうどその頃、但東町の担当の豊岡の妻が女の子を出産する。夫婦は赤ん坊に「かよ」という名前をつける。『豊岡かよ!』という題名は、大山鳴動して結局豊岡という名前に落ち着いたことに対する市民たちの反応であると同時に、但東町の担当の豊岡家に生まれた女の子の名前でもあるわけだ。

ラストではテレビのアナウンサーが「あれから17年経ちましたが、どうですか?」と町に行く市民たちにインタビューする。名前をめぐってあれほど紛糾したにもかかわらず、人々の生活は何も変わっていない。虚しいと言えば虚しいが、人間というのはそういうものだし、考えようによってはそれが人間の力、生活の力なのかもしれないということを思わせて芝居は終わる。

筆者はこの演劇祭で見た4本の芝居のうちこの『新・豊岡かよ!』が一番好きだった。また、それと同時に豊岡市のことについても少しは知識を得ることができた。

筆者は本当は出石町で劇団・PUYEYが上演した観客参加型の街歩き芝居『Today in 出石』や神鍋高原(日高町)で仙台の劇団・短距離男道ミサイルが上演した『BNN』も見たかったのだが、交通の便が悪いために断念した。「こんなに広域でなくてもいいのに」、「自家用車で回るならともかく、公共交通機関を利用してあちこち回るのは無理がある」、「地域をかぎって、例えば城崎と豊岡に出し物を集中すればいいのに」、「フランスのアヴィニョン演劇祭でも、イギリスのエジンバラ演劇祭でも、町自体はそれほど大きくなり、移動には困らないはずだ。それを真似て欲しい」というのが筆者の偽らざる思いだったが、『新・豊岡かよ!』を見て地域の事情や思いを知ってしまうと、そんなことは言えなくなった。

最後に総括をしておこう。

豊岡演劇祭は優れた演劇祭であるが、問題があるとすれば、それはほとんどの演目が市民ホールや市民会館、つまり閉鎖された空間で上演されていたことだろう。もちろん知っている人間は予約して見に行く。しかしそれでは町の住

民や観光なり仕事なりでたまたまこの地を訪れた人々を取り込むことはできない。

その意味ではストリート・パフォーマンスは重要である。これならば演劇祭が開かれていることを町に行く人々に印象付けられるからだ。それをさらに拡大して、町の中で芝居をすることはできないだろうか。広い空間は必要ない。公園や広場のようなところにテントを張り、その中で30分から40分、長くて1時間前後の芝居を上演するというようなことができれば賑わいが生まれ、町の人々やたまたまこの地を訪れた人々の間でも演劇祭の認知が高まるのではないだろうか。

豊岡演劇祭は非常に楽しい催しであると同時に、兵庫県の文化、さらには日本の文化を考える上で非常に重要な試みである。しかし、先行きは必ずしも明るくはない。「豊岡に演劇はいらない」と考える人も少なくないだろう。だからこそ、筆者は豊岡演劇祭がさらに発展し、日本の誰もが知っている祭りとなることを願ってやまないし、来年もなんとか時間を作って豊岡演劇祭に行くつもりである。